「『棚からぼた餅』の卒業」

平野香菜子　（30 代）

薄情な子どもだったと思う。何不自由なく温かい家庭で育ったはずなのに、いや、不自由がなかったからこそなのか、私はずっと「誕生日を祝われる意味」が分からなかった。たまたまその日に産まれただけで、一日ずれていれば次の日が誕生日になっていただけの話だ。何がそんなに特別なのか。三十を過ぎた大人になってからも、その冷めた感覚は変わらなかった。

もちろん、祝われるのは悪い気はしない。ケーキは美味しいし、プレゼントも嬉しい。学生時代には友人にサプライズ祝いを企画するなど、人並みに誕生日イベントを楽しんではいた。しかし心の奥底では、自分が何も成し遂げていないのにちやほやされる状況に、どこか「棚からぼた餅」のような座りの悪さを感じていた。 私にとって「お祝い」とは、努力した先に得られる対価だった。自分の意思で産まれてきたわけでもないのに、なぜこれほど祝福されるのか。むしろ本当に祝われるべきなのは、命がけで産んだ母と、必死に育ててくれた父ではないか。そんな疑問を抱えながらも、私は誕生日の恩恵だけをちゃっかり享受する、可愛気のない子どもだった。

そのひねくれた概念が、ふっと溶けていくのを感じたのは三十を過ぎてからだ。私自身が出産を経験し、やがて息子の初誕生日を迎えたときのことである。 息子の前にケーキを置き、一本のろうそくに火をつけた瞬間、「嬉しい、この子の誕生日を全力で祝いたい」という強い衝動が、堰を切ったように溢れ出してきた。

あんなに小さく、泣いて助けを呼ぶことしかできなかった無力な塊が、一年間で多くのことが出来るようになった。大きな病気や怪我もなく、今日ここに立派に存在している。その事実がただ愛おしく、「息子はすごい、本当によく頑張った」と、心の底から一歳の命を祝いたくなった。

かつての私のロジックでいけば、ここで「一年間育て上げた私がすごい」という結論になるはずだった。しかし不思議なことに、自分を労う気持ちなど一ミリも湧かなかった。ただ目の前の存在が愛おしく、その産まれた日と今日までの歩みを全肯定したい、ただそれだけだった。 誕生日は、主役が手柄を誇る日ではなく、周囲の人間が「あなたが無事に産まれ、今も生きていてくれてありがとう」と、その存在自体に感謝を捧げる日だったのではないか。三十数年かけて、私はようやく祝う側の本当の心理にたどり着いた。

まもなく、息子は二歳になる。最近はよく喋るようになり、お気に入りのキャラクターもできた。

「当日は何をしようか。何をプレゼントしたら喜ぶだろう」

私は今、かつて両親が私にしてくれたように、いそいそと誕生日の準備を始めている。